

「働く」とは、一体何だろうか。

## はたら・く【働く】

### [動力五(四)]

- ・仕事をする。労働する。特に、職業として、あるいは生計を維持するために、一定の職に就く。「朝から晩までよくー・く」「工場でー・く」「ー・きながら資格を取る」
- ・精神などが活動する。「知恵がー・く」「勤がー・く」

(デジタル大辞泉より引用)

と、あるように辞書的な意味では「対価として生活の糧を得る」ことが主な意味合いとされている。これは産業などという言葉がないほどの太古から続いてきた。だが、物的資源が豊かになって久しい日本では、最近になって仕事そのものに意味を見出す「自己実現」が取り沙汰されることが多くなったように思える。

では、そもそもなぜ働くことの意味を考えるのであろうか。その答えは単純で、余裕が出来たからである。それまでは手段として割り切る「しかなかった」。いや、厳密に言えばその思考があっても長続きしないか、意味がないものだと無視されてきたものだ。

現在、私は学生であるが、「働く」ことが縁遠いものというわけではない。アルバイトやインターンシップ、そしてなにより就職活動がその距離を縮めており、大学生にとって就職活動はもはや一つのイベントとなっている。12/1(2014年より4/1に変更)に就職活動(企業エントリー)が解禁され、就活サイトから有名な企業に様々な学生がなだれ込みサーバーをダウンさせるなどの事例も確認されている。

そしてそんな風潮の中、自分自身もその例に漏れることなく就職活動を行っている。必要に駆られてのことではあるものの、現在自分の中で最も関心のある事項であり、それがそのままこのテーマを選択した理由になっている。

現代の日本に生きる大学生の多くは、就職に関心がある。とりわけその中でも多摩大学はその傾向が強い。多摩大生が「社会人マイナス4年生」と呼ばれていることから明らかであり、インターンシップや就職支援講座といった制度の充実、それに裏付けられた高い就職率もそれを物語っている。それだけではなく、社会全体の気風としても「大学全入時代」といった批判的な言葉、その一方で続いている受験戦争、不景気である現在の日本においてなお隆盛する学習塾産業などもそれを象徴しているといっていいたいだろう。

多くの、というかほとんどの学生が行うであろう就職活動。やはり多摩大学生としては、研究に値するテーマであると思うし、実際に行うにしても働くことに疑問を抱くことは(考える余裕がないだけなのだとともに)必要なプロセスだと思う。

願わくば、この発表を聞いた方々が(既に終わっている人であれ、これからであれ、現在進行形であれ)「働くこと」の意義や意味について考えて欲しい。

## 参考文献

寺島実郎著「何のために働くのか 自分を作る生き方」 新春文庫 2013年